

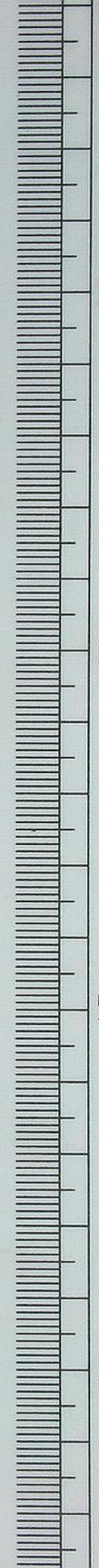


下

近世櫻田講談



上



10

15

20

25

A450



徳川十三代將軍

贈正位太政大臣在職六年ト也

正二位内大臣源家定公

嘉永六年

十月征夷

大將軍

任せられたる

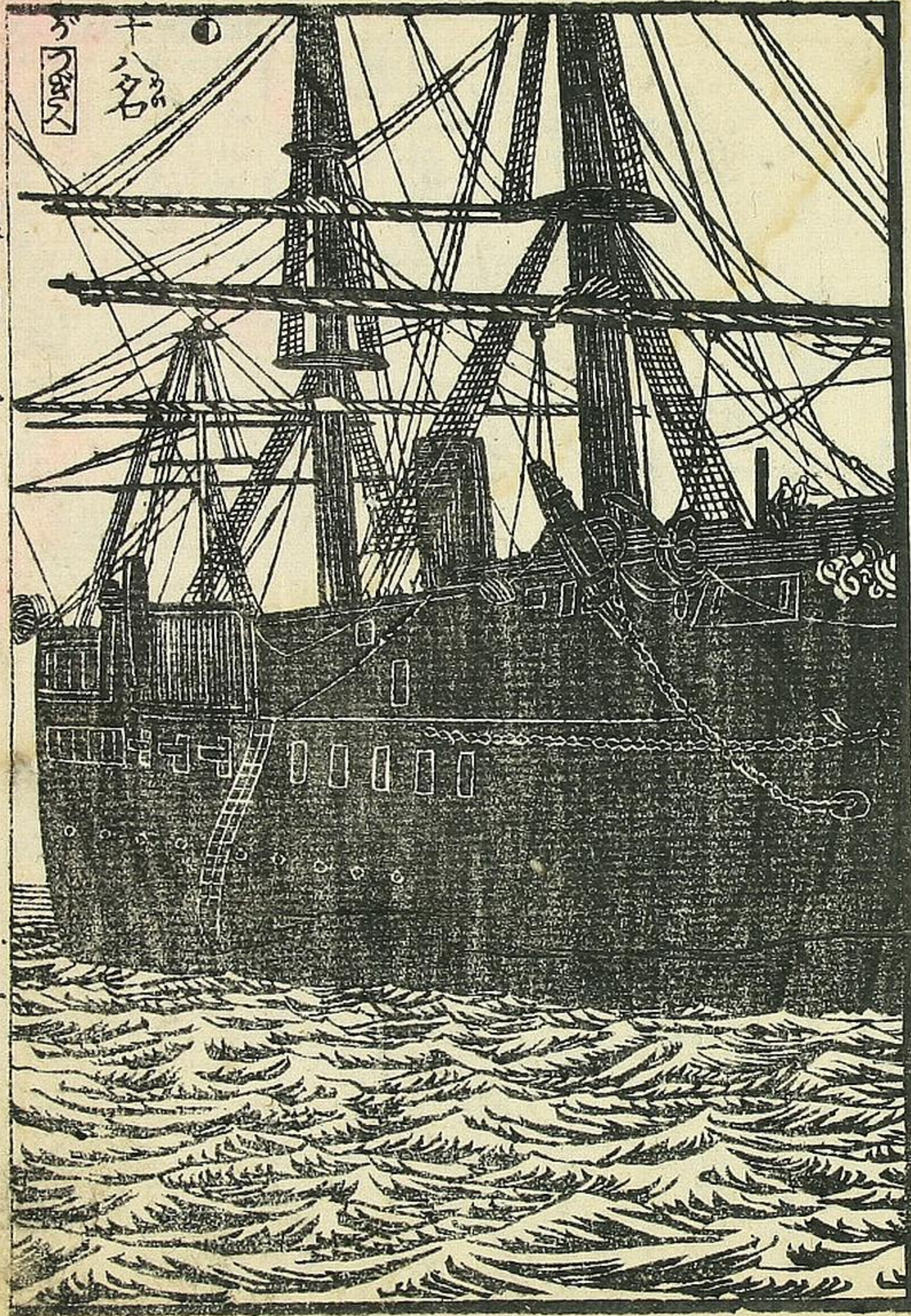
年始て外國船渡来して

交易を議せ

應永年屋畫

嬰日上

48-8071

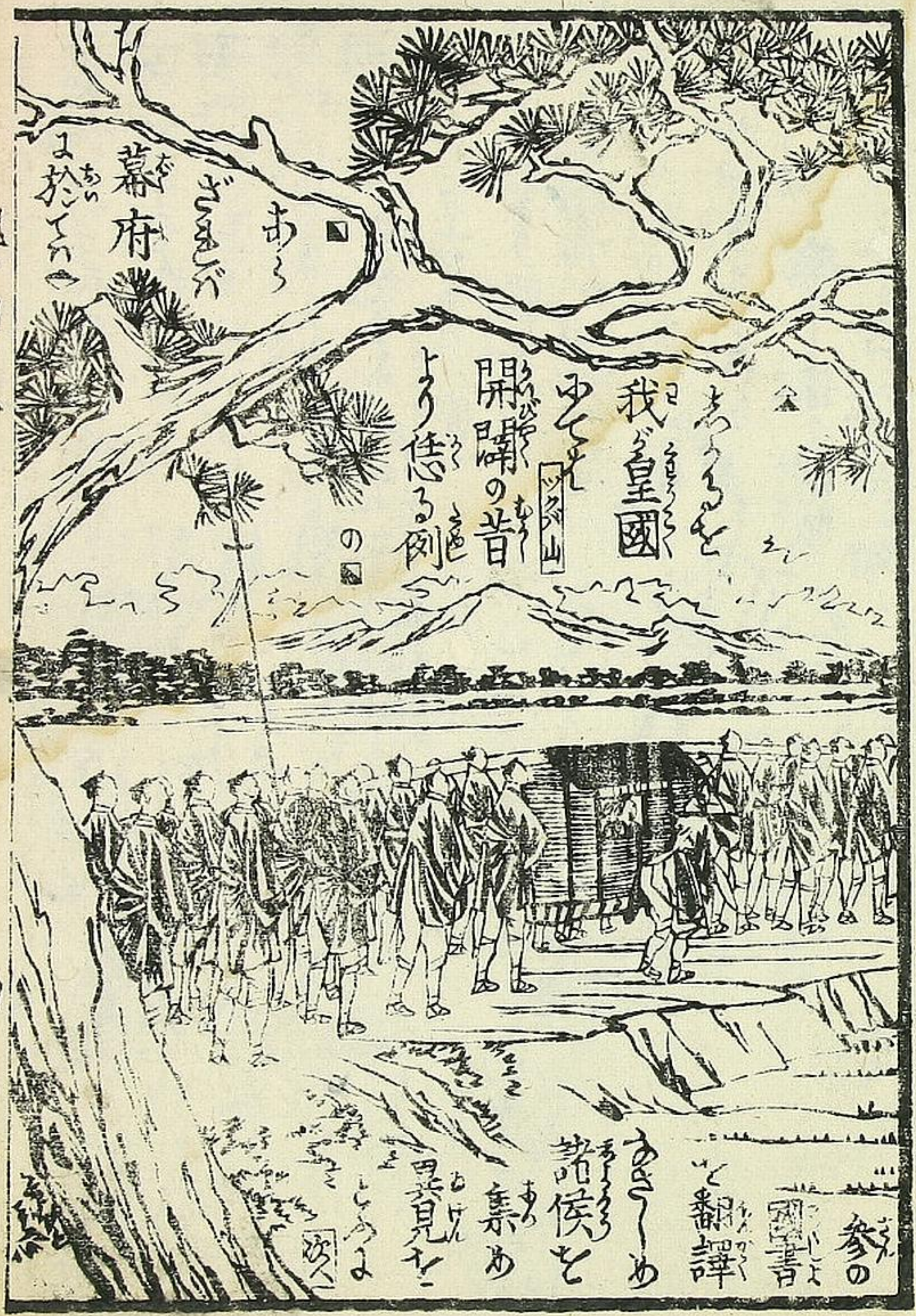
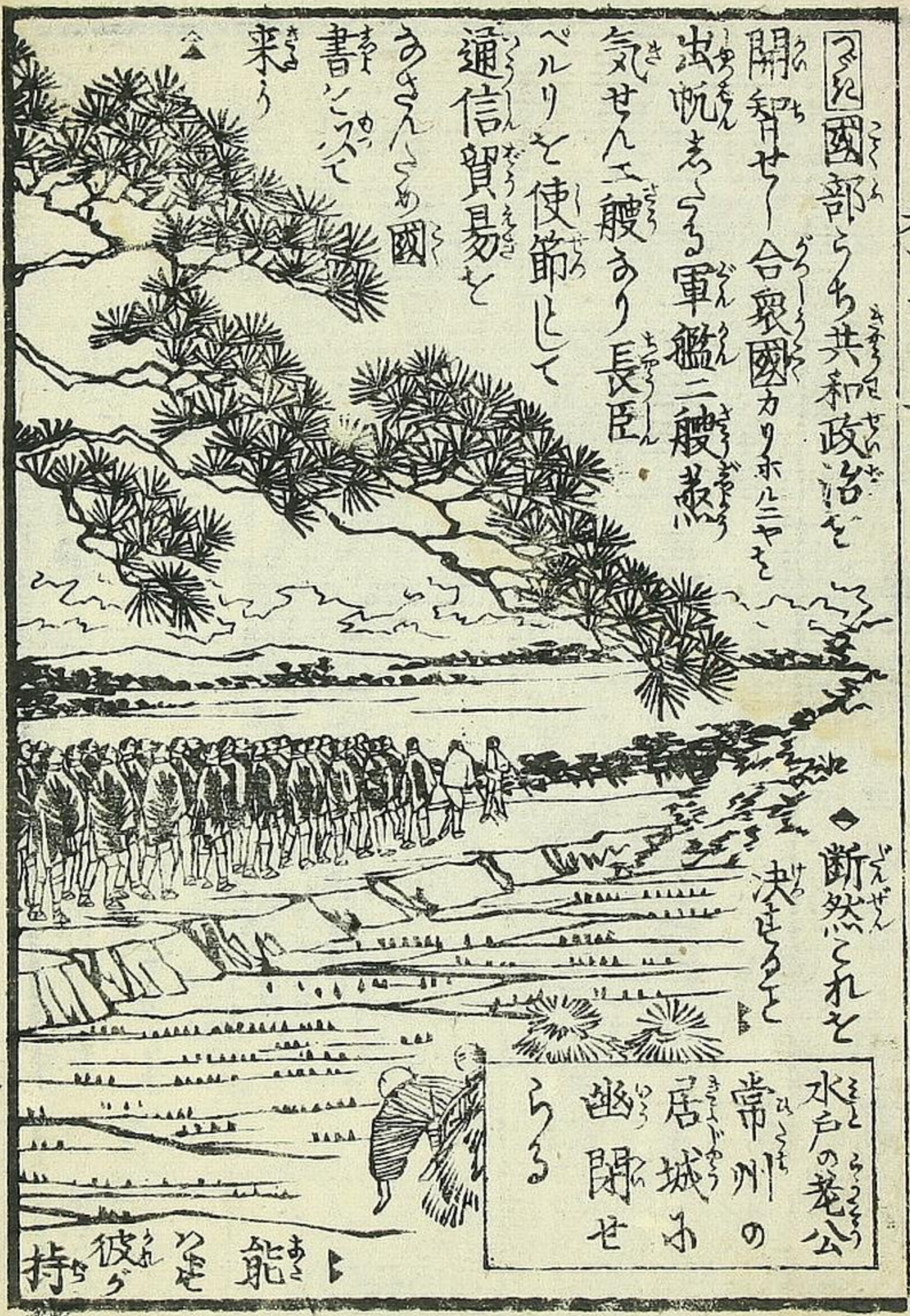


亞墨利加の
 軍艦相州
 ちり賀の
 港へ渡来
 せり

鹿兒
 島の藩士
 有村治左
 門か

英 櫻田講談 上
 孝明天皇の萬延元年
 三月三日櫻田御門外小
 おおしく水戸の脱士佐野
 竹之助黒澤忠三郎
 森始め





何きも和戦の
二字をさうし更
確定せざるにけり
武州横濱表は質
易とゆふを然るも
六月廿三日右は村三
家の
のりも更あり國主
方登城
ある其時水戸中納
言殿あり
松の間大廣間あり
大老井伊直高どの
の
せふり大論を遂に
國賊
也とのいふにけり
大老大に怒り



老公の耻を
雪ぐんと水
藩の壯士
筆を
集合す

其日の
下城刻限は成
けられ何きも
其日の退出せり
水戸家よ於て
翼廿四日曉六ッ
告る
大鼓と共に
小石川の館を
立出のひ柳宮の
登
城ありと將軍の
御對
顔のちびる叶
せざるも
事ありけれ無
念ありとも





大日本大小至忠招楠公魂表

七番目... ちのり... 藤原... 公...



退... 小石川の館... 幕府より

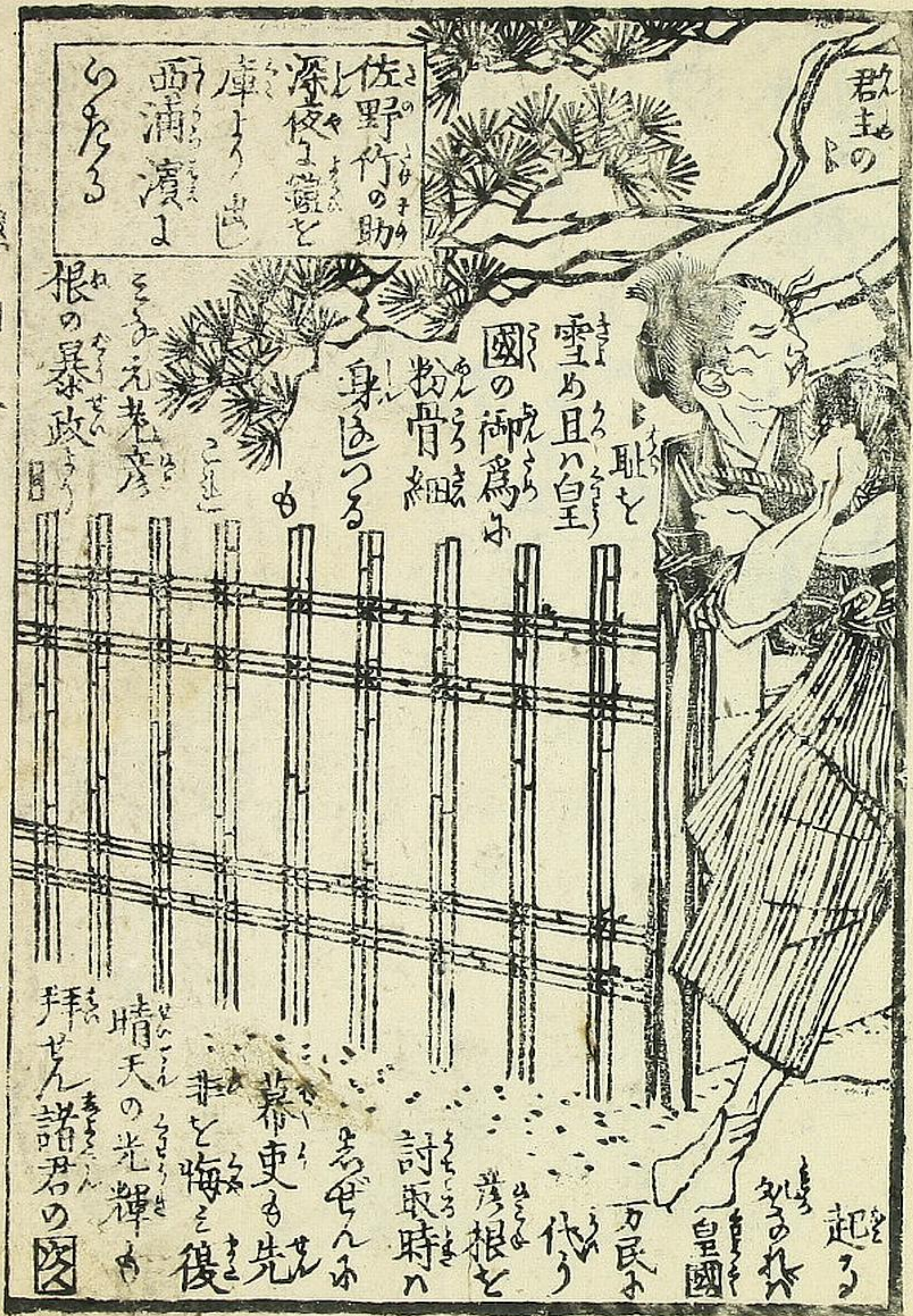
水戸の家臣等ハ... 奮然と堪へ... 老...



御使者あり... 前中納言... 御慎と有る... 名命あるも...

壮士の輩... 誓ひを立... 東武へ... 趣くんと... 準備せ

公の耻を... 區々集合... 八十名長... 誰有... 中...



君主の

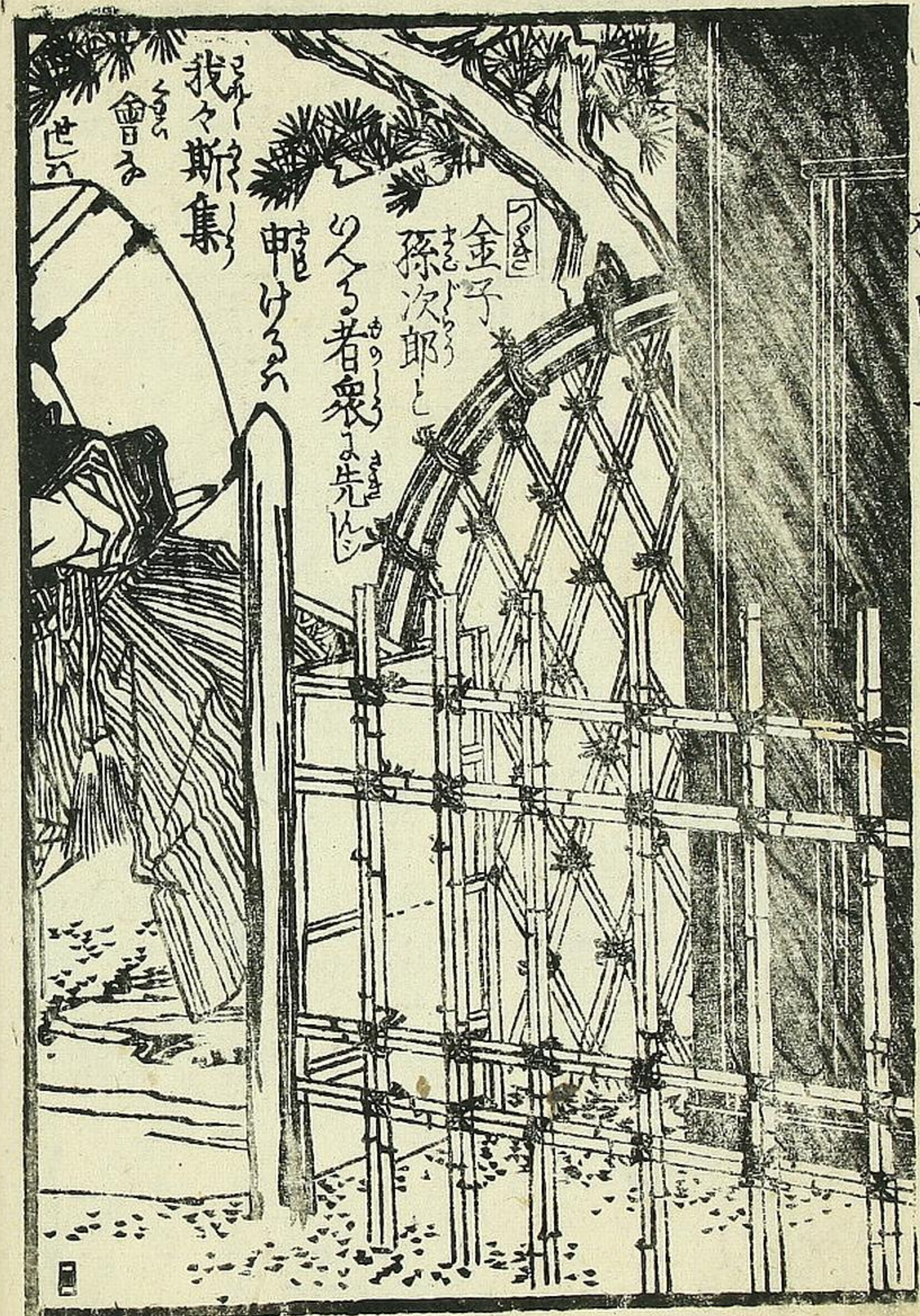
佐野竹の助
深衣の鏡を
庫より出せ
西浦濱よ
りたる

恥と
雪り且の白王
國の御爲に
骨細
身はつる
も
そま元老彦
根の暴政

起る
皇國
万民の
代り
討取時の
幕吏も先
非と悔と復
晴天の光輝も
拜せん諸君の
因

殿女田上

二



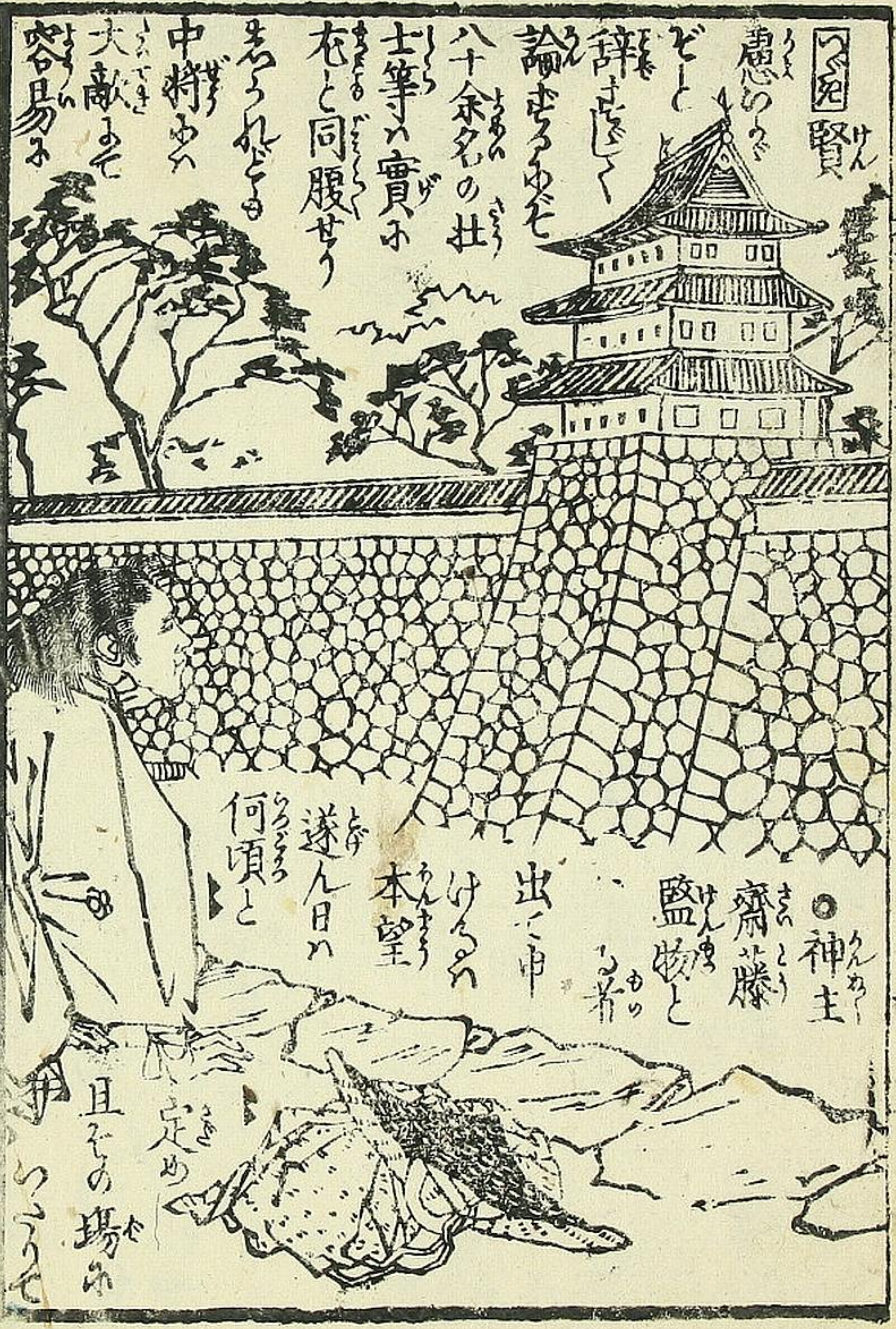
我々斯集
會る

世の

金子
孫次郎と
りたる者衆は先
申ける

櫻田上

六



賢
 慮の多
 ぞと
 辞さる
 諭さる
 八十余名の壯
 士筆ハ實ハ
 衣と同腹せり
 中將ハ
 大敵ハ
 容易ハ

神主
 齋藤
 監物と
 出申
 けり
 本望
 遂人日ハ
 何頃と
 且その場ハ
 定め

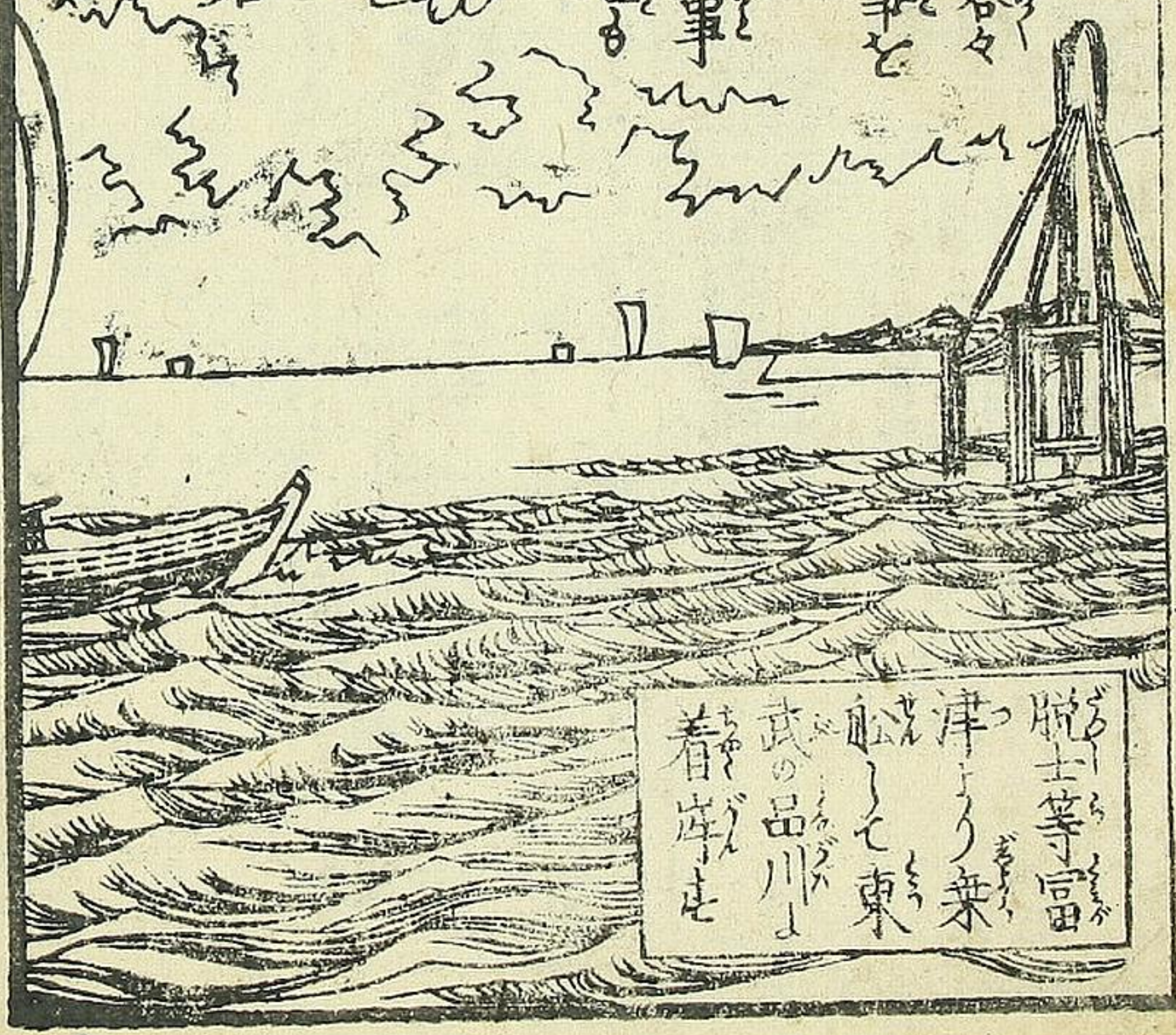


討取こと
 かくら
 されども不意を
 討とらぬ固き
 事あらんまは
 大老の
 首ハ
 手の内ハあり
 と勇ををんで
 一同ハ忽ち
 決議ハ及びけり
 中ノ同國靜村の

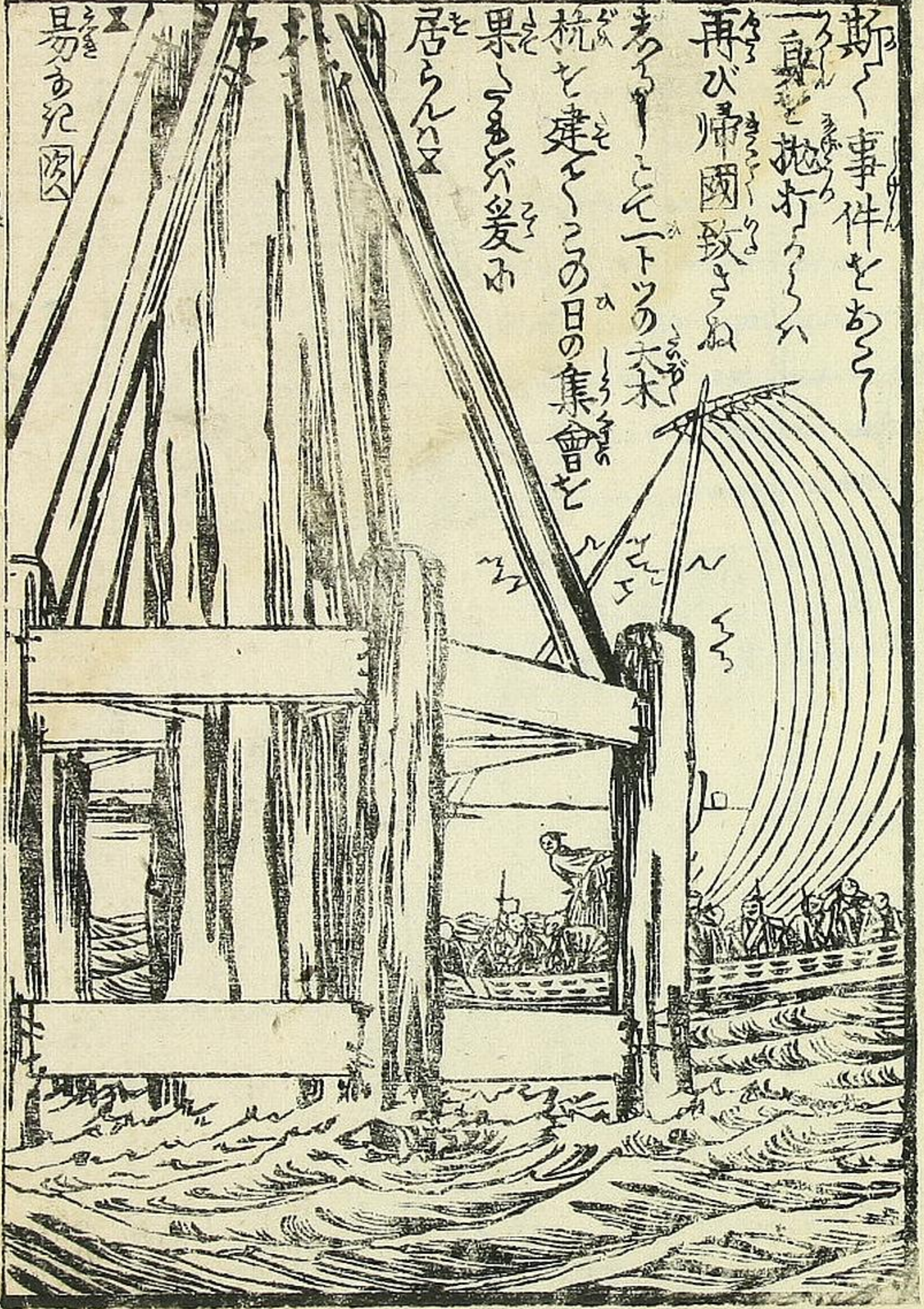
朝日三日兩日の
 間と定め
 依て思ハ三月
 乱士の如ク
 其前ハ
 其名ハ
 後日
 覚悟
 討死
 君恩を謝
 せん壯士
 城地ハ向
 ひく遥仰
 うま

嬰
 日
 上

出府あり 事密々々小
 謀るんまゝい勿論あり又各々
 彦根の罪科をあげ止事と
 得て斯の如きふ及々の
 趣意書を懐きあり候事
 けりと言けり其儀在り
 ありと皆々監物あり
 頼りけり齋藤是と
 志すめ依り一同決正の
 上は血判せんとも七十余名
 神文は血板し斯く金子
 孫三郎申けり日と



脱士等富
 津より衆
 船して東
 武の品川
 着岸止



斯く事件をあら
 一身を抛りし
 再び帰國致さぬ
 考へしこと下ろの末
 杭を建てこの日の集會と
 果しむる爰に
 居らん

易き
 易き



楊田

九

010190508370

○ 小栗判官 一代記 六册	○ 大久保武藏鑑 二册
○ 於古代源之丞 一代記 四册	○ 於染久松 一代記 二册
○ 西井正雪 一代記 四册	○ 彦山權現 二册
○ 天下茶屋 敵討物語 四册	○ 八百屋お七 一代記 二册
○ 日蓮聖人 御一代記 三册	○ 朝顔 日記 四册
○ 宮本武藏 一代記 二册	○ 景清 一代記 四册
○ 徳川天一坊 一代記 二册	○ 新作 地口集 一册
○ 箱根權現 覺仇討 二册	○ 西國觀音靈驗記 一册
○ 佐倉宗吾 一代記 一册	○ 伊賀越敵討物語 一册
○ 清 盛 一代記 一册	○ 新作などく合 一册
○ 假名手本 忠臣藏 一册	○ 徳川 武勇傳 六册
○ 同 二册	
○ 算法教授書 一册	

東京 日本橋通三丁目十三番地
 丸屋 小林鐵次郎板

刷印兼版鉛型紙社文兩聞新入繪京東

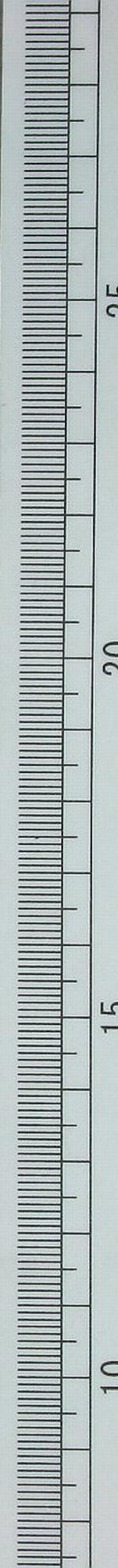






近世櫻田講談

下



10

15

20

25

A 250
2



近世櫻田講談
下卷

水藩の脱
士姿を
變じ大
老の邸を
窺ふ

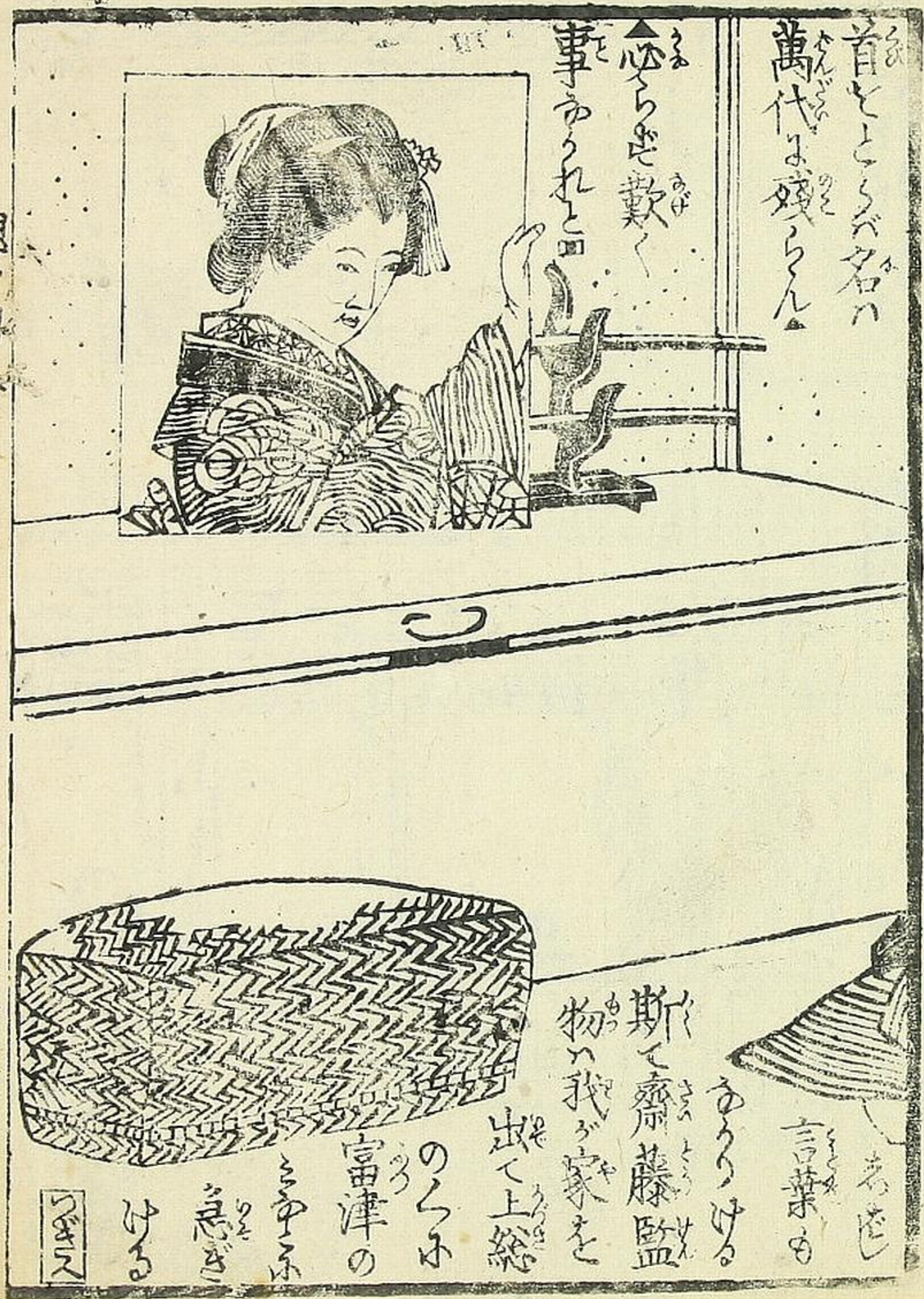
是より
今夜江戸
表へ発足は
掃部頭が

首を討とらんといふと八十余名
同志の者と長岡の

會議
堅約

ついで

48-8072



首とくろく名の
萬代は残らん

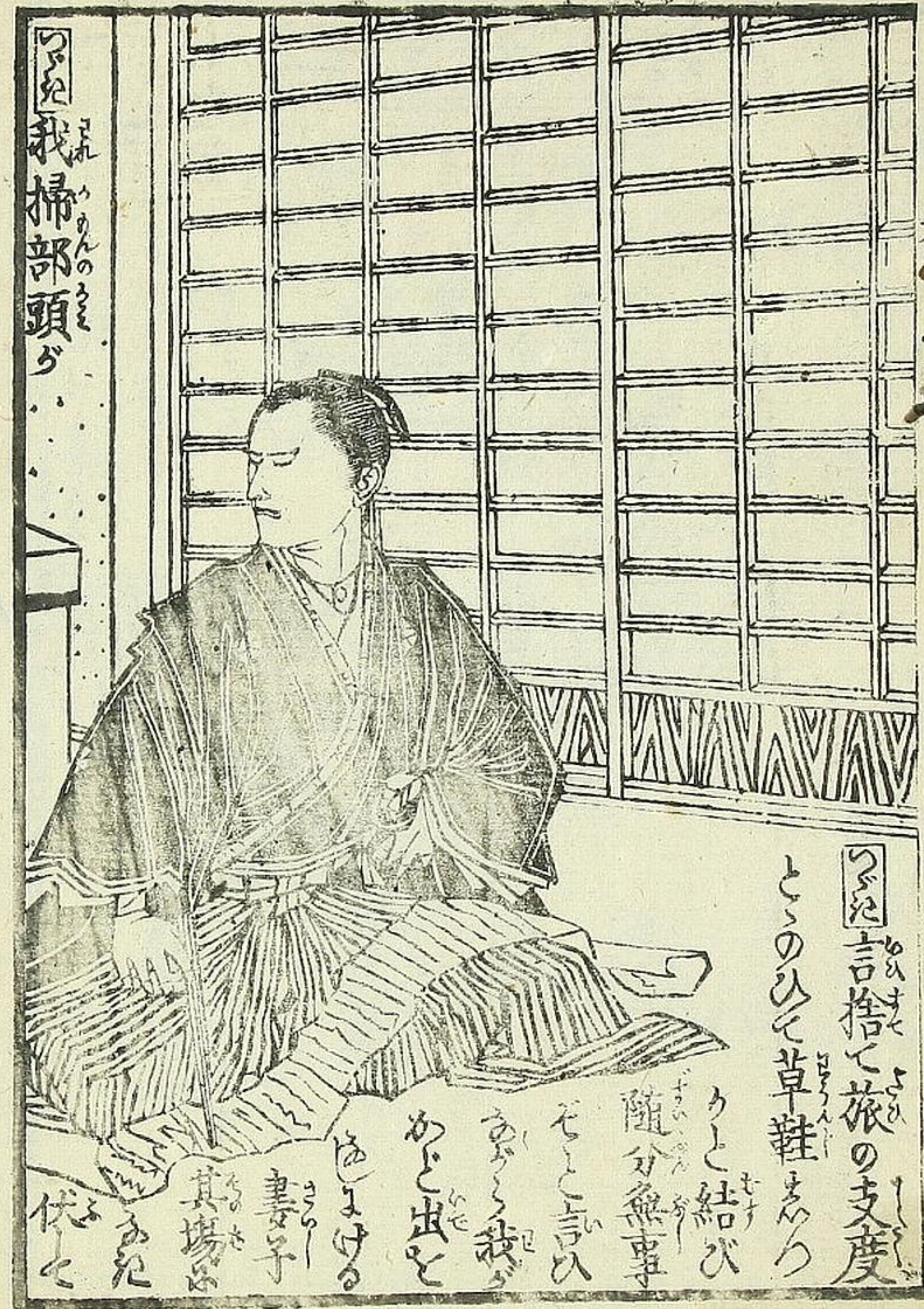
必らずに歎く
事あられど

言葉も
あつりける
斯く齋藤監
物の我が家を
出て上総

のらぬ
富津の
急ぎ
ゆる

柳屋

柳屋



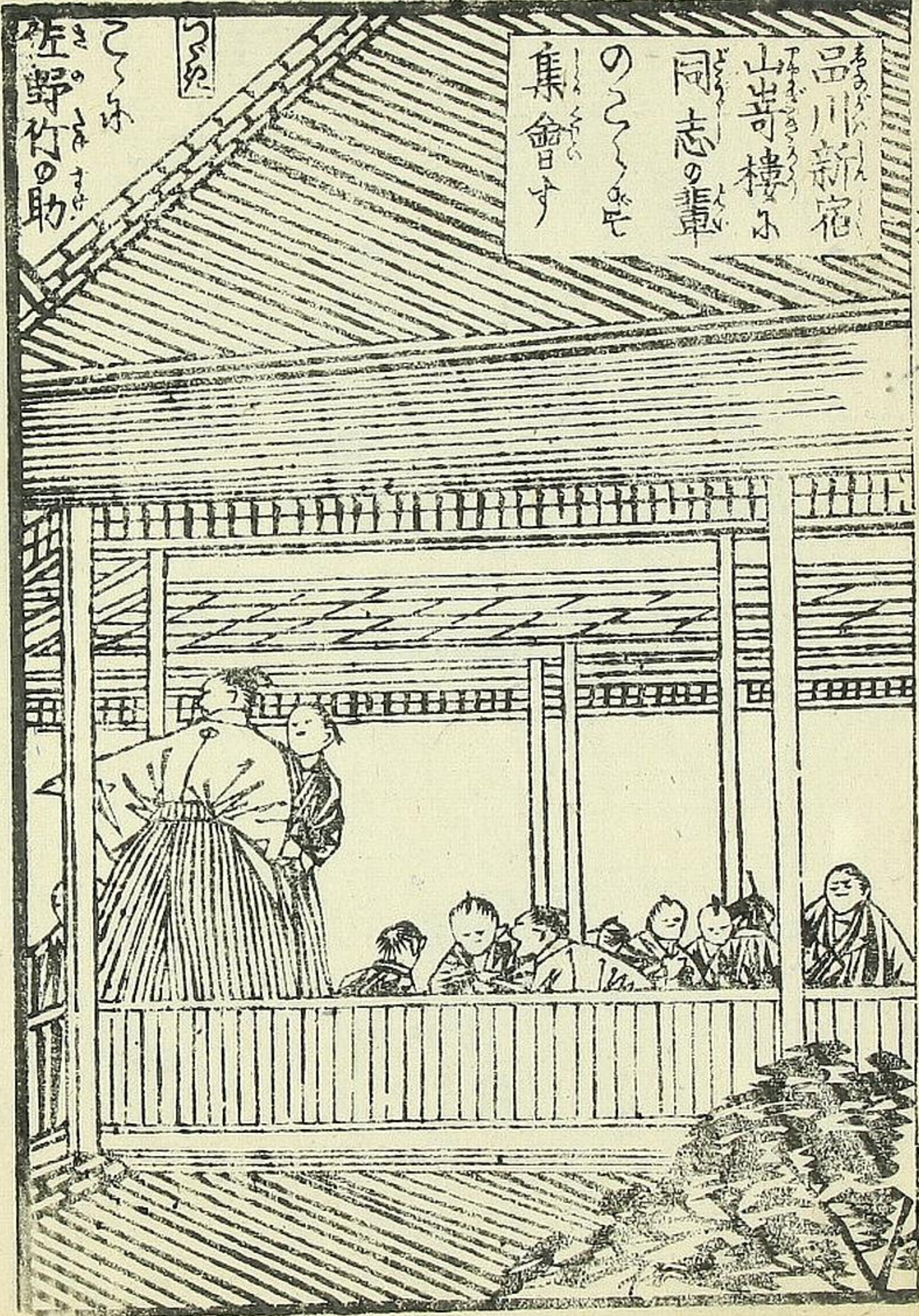
我掃部頭が

言捨て旅の支度
とのひて草鞋あつ

随分無事
そとこ言ひ
あつり我が
めど出を
はよける
妻予
其場は
伏を

十一

品川新宿
山崎樓小
同志の輩
のついでに
集會す



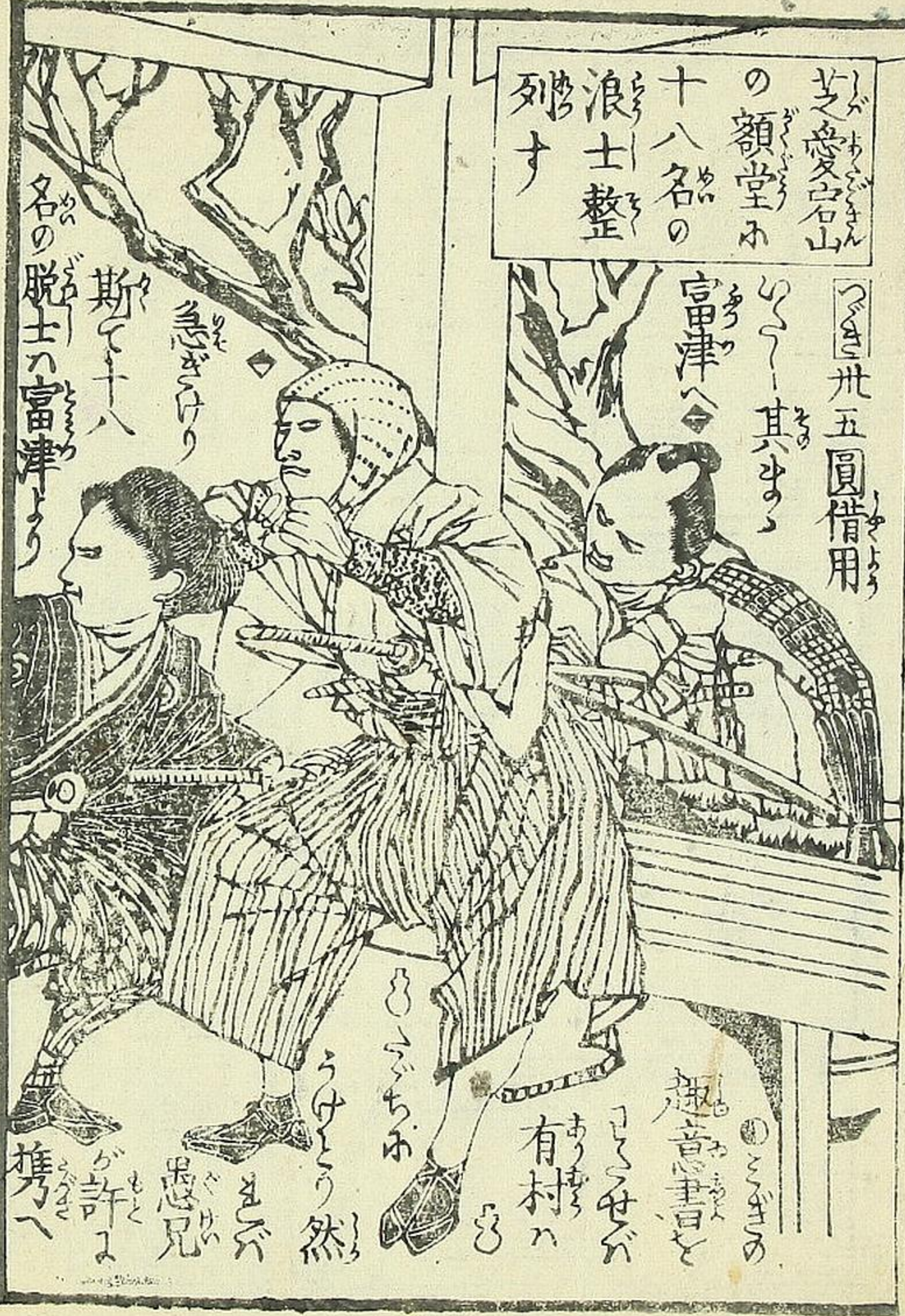
佐野竹の助

光明の前
黄門卿の小姓役を
ついでに高録されども
両親よを中へこころを伯父
佐野竹の助とていふ小養
育てうけあつてふ此大事小望と
路用の金のあつたゆへは伯父は語りて路用金を
うけとるをよと思へどもむじの人はまは先此儀の
止めあせん斯ては大事とて風あし深夜よのう
作の助は傳る鎧を庫より取り出し二月十八日
夜の明くころ日頃知已ある西浦濱の郷土其小の
許よとて品の品を携へ来り主は對話は金子段

芝愛宕山の額堂の十八名の浪士整列す

つぎ卅五圓借用

いづれ其の富津へ



斯て十八名の脱士の富津より

急ぎの

趣意書を

有村の

いづれ

然

愚兄

携へ

衆船

江戸川

着船は夫より

諸々へあそそけり

かゝる程は佐野

竹の助金子孫三郎黒沢

忠三郎の三名の東武麻布十番

屋敷はまのひまの薩州の浪士

有村治左門の甲の至る彼の

あり村をく訪うくあそめ右の



罷り

越

其意

を

談せん

野夫やも功の

拙策あそん

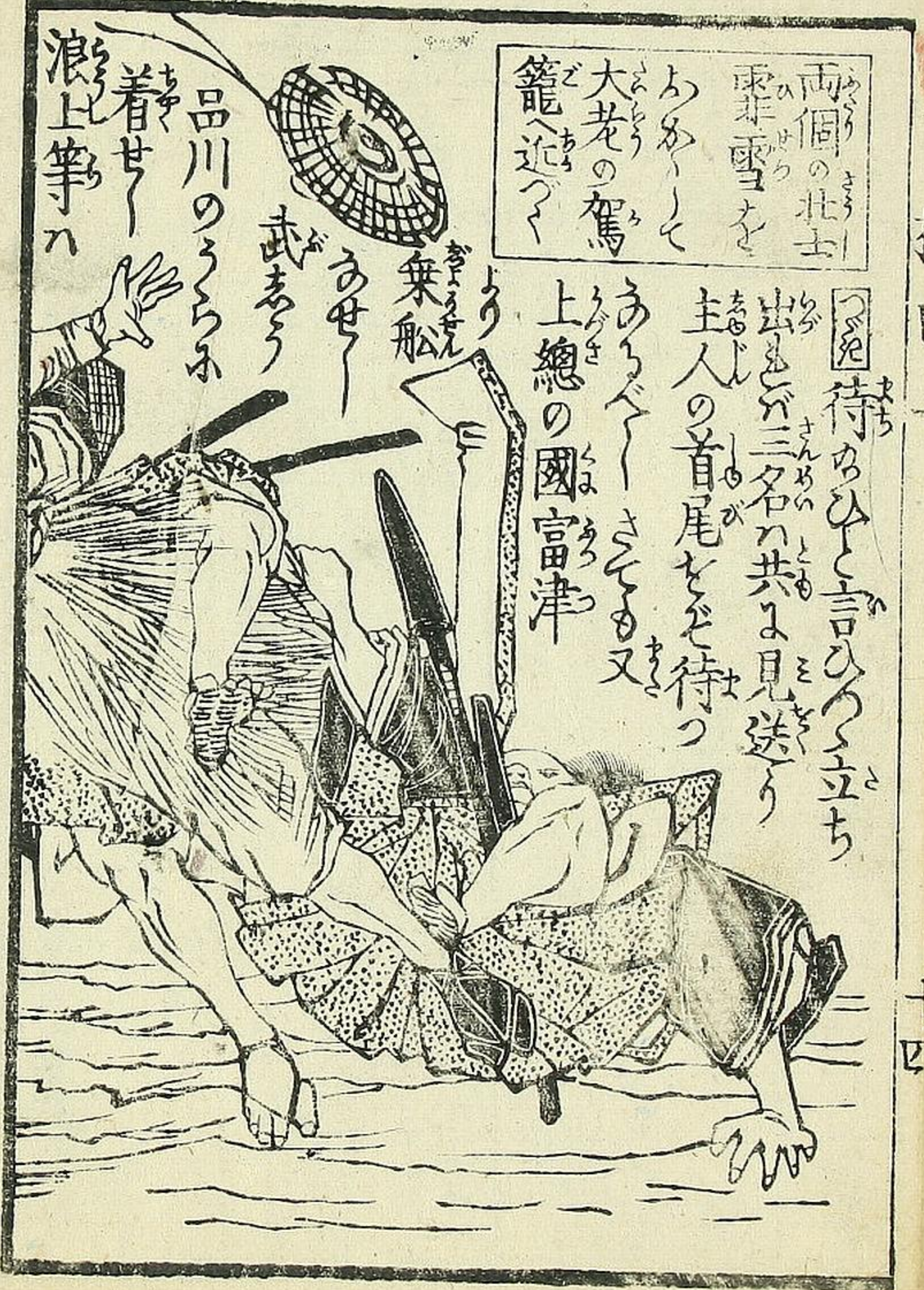
諸君の拙者の

久へんまを

打解けら

ろげ

兩個の壯士
粟非雪を
あかしく
大老の駕
籠へ近づく



待たせよと言ひつゝ立ち
出ても三名の共に見送り
主人の首尾を待たせ
あつてさても又
上總の國富津

品川のうらふ
着せし
浪上筆の
乗船
あせ
武まう



とあし 諸々
一潜伏あり
つる中ゆも
森五六郎の
小石川屋敷よ
あり 関鉄の助
一封の
遺ちしければ
鉄の助ハト聞よ至り
開封ありと讀終り
ちや鉄の助大ひま

手紙を



浪士幾も
失錯さば
頼母さきものうま
斯をうりの

悦び實小親友の

大事事件
小接し
助勢は

是も下のこころ
事あり
うと
て
さうぞくか

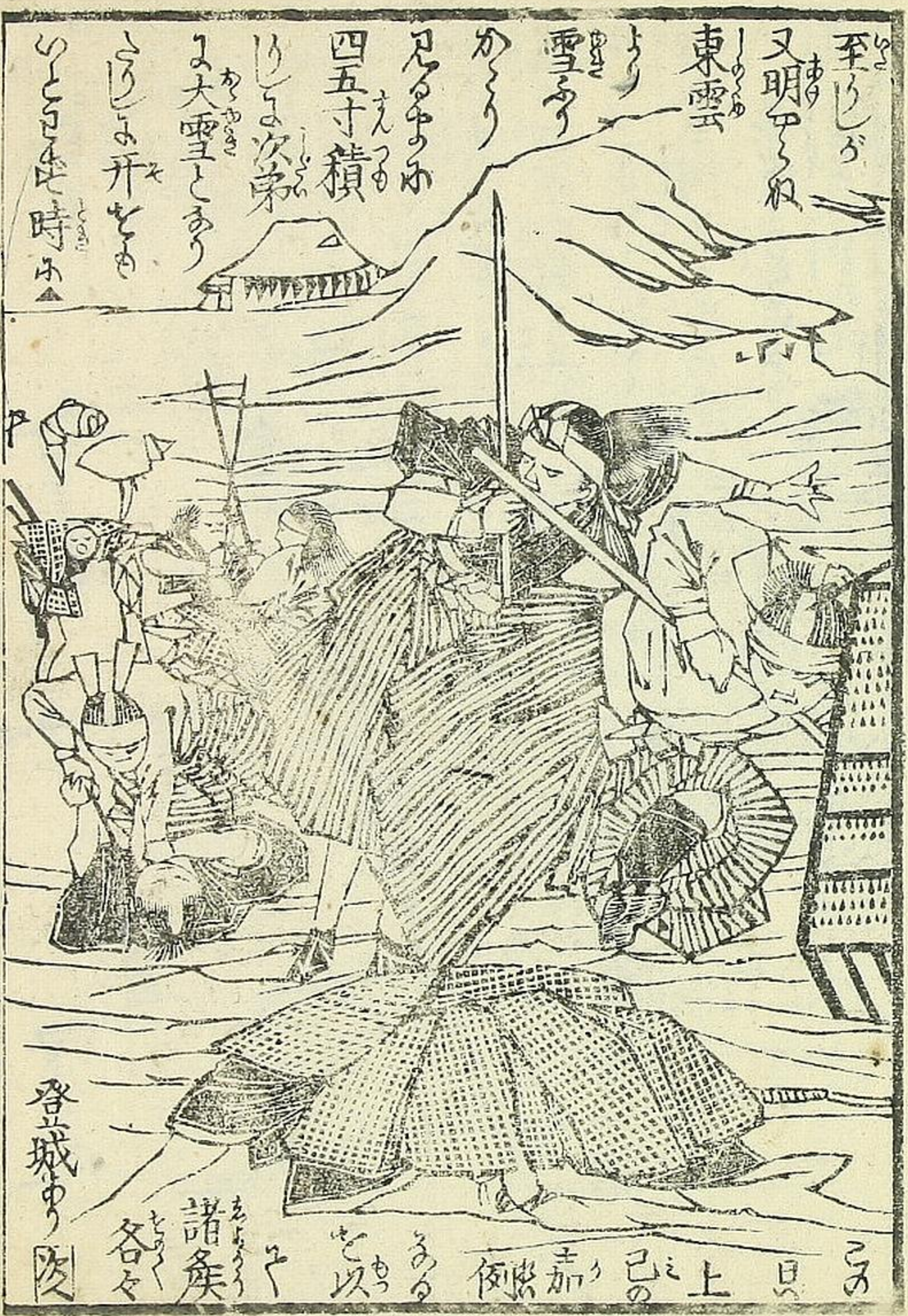


支度とつこのへそ
外妻あり
あつのがもよふ
直に至り
余所あり

つげ品川
さうぞく急心さ
けりささて三月

有村もめ皆同よ
品川新宿山寺樓下

集會はよつて
浪士あゆ
當日小
至りさ
議の會



至りしが
 又明アツね
 東雲
 雪
 か
 見
 四五寸積
 して次第
 大聖とあり
 して開せぬ
 時小

嬰田

登城あり

貝の上
 己の
 加
 例
 以
 諸侯
 各々



壯士等
 駕籠の
 左右小立
 守中將を
 撃殺す
 其手
 配と定
 先當日ハ
 来三日大老
 登城を
 切
 又各々件の趣
 意書とて内藤
 紀伊自ら自訴せん
 事決定
 隱家より入り
 三月二日小

三月
 元
 万延
 米
 會
 屈
 強
 勇
 利
 和
 日

岡部千次郎

外一名中

将の首級

と携へ水

戸に到る

就

中井伊中将より其

身元老よりふより

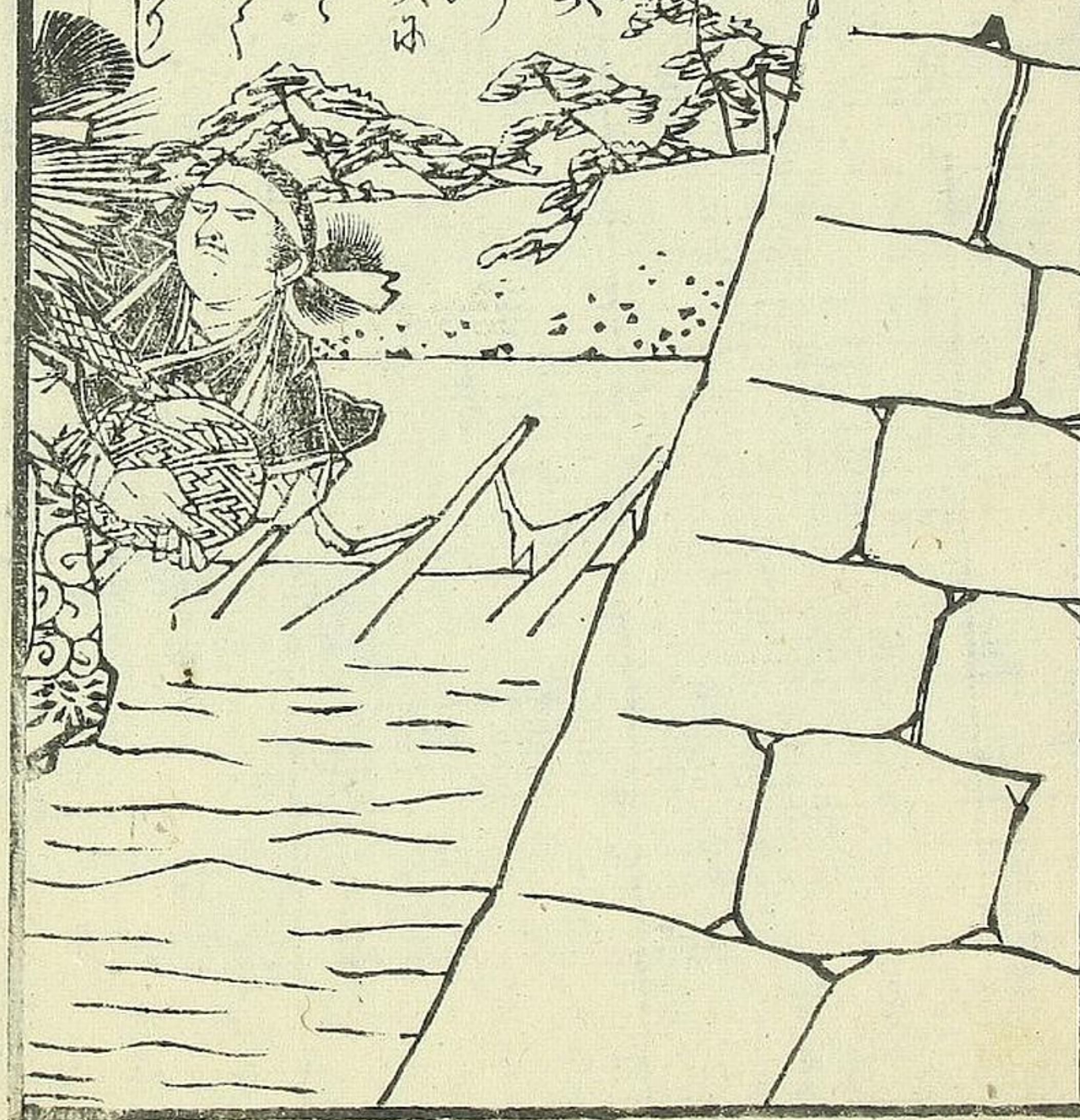
辰の刻の太鼓と共に

我甲しを立出や

櫻田の門前近

こと壹町は足さき

頃行装田舎の社



家とも思ひたれ

立の者二人駕籠の

鳩ふを寄り

?願書を捧

出んとせ然るを

其日の前夜より

その時に至り弥

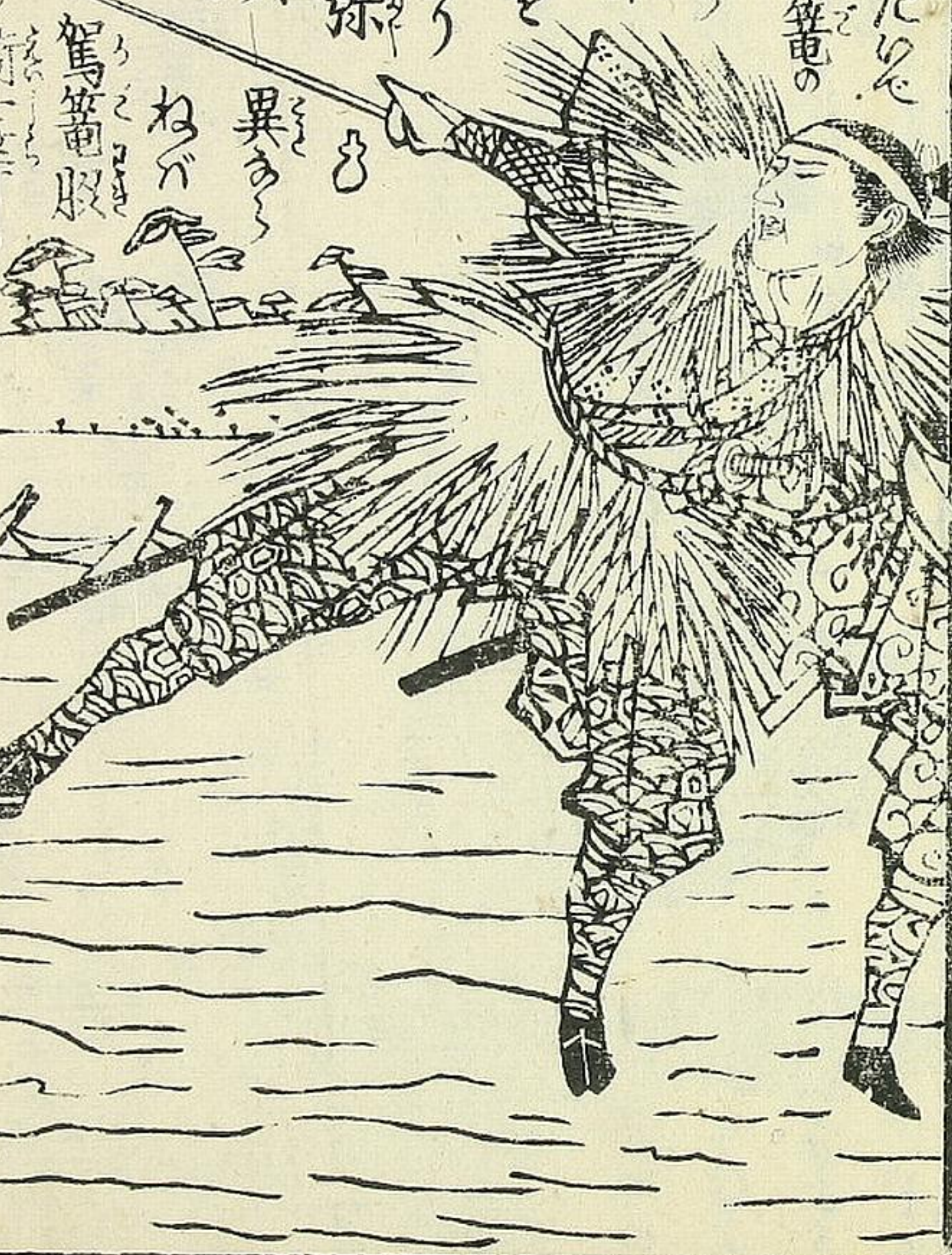
増をばけく吹

聖の為は蘭

られ咫尺も

分ぬ鳥羽玉

の箇



例の興訴

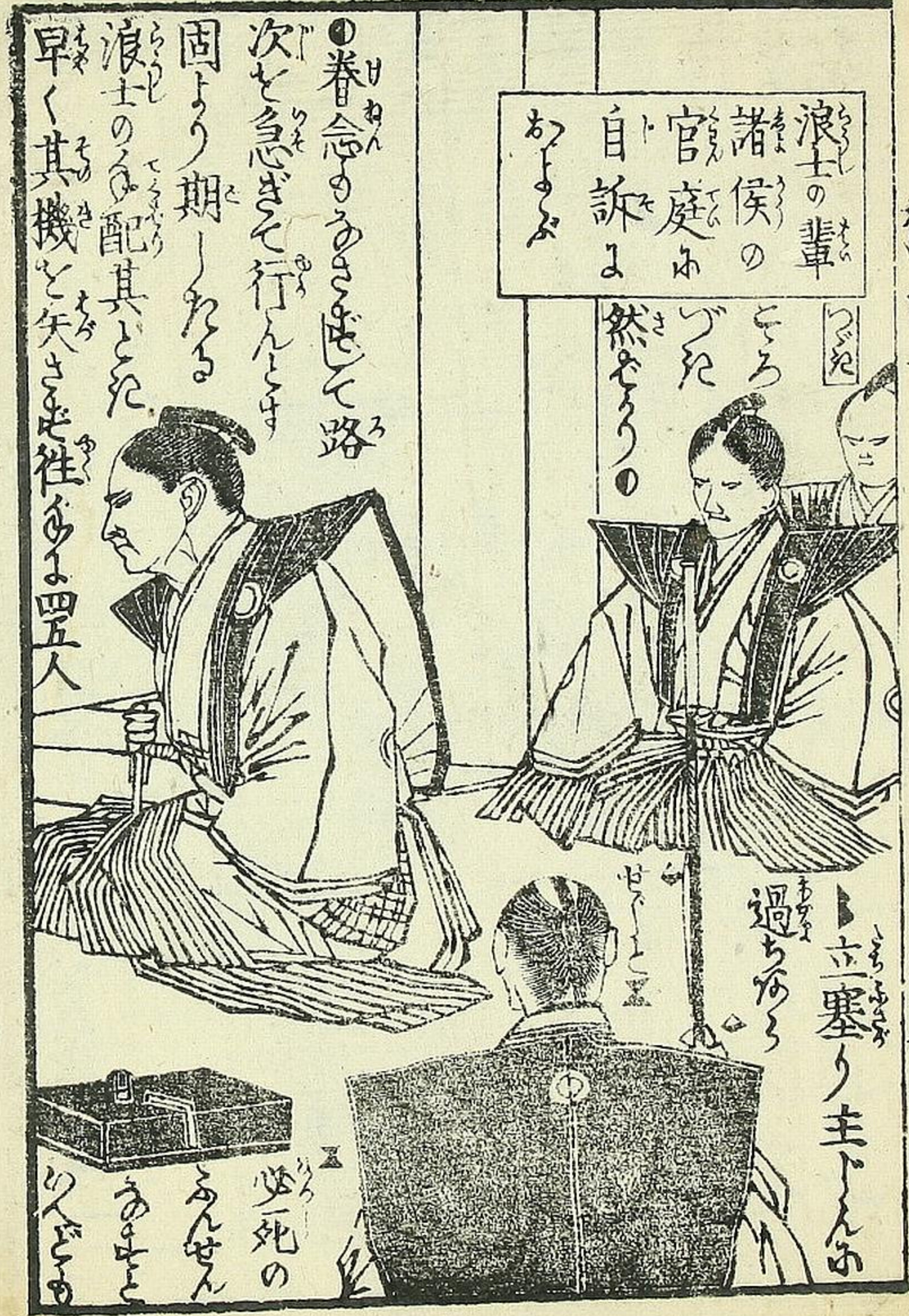
衛士等

駕籠股

ねが

異

浪士の輩
諸侯の
官庭の
自訴よ
およぶ



●眷念のあはれはして路
次を急ぎて行んよす
固より期したる
浪士の配其とた
早く其機と矢とを往よ五人

然るも
立塞り主下んふ
過ちあり

必死の
あんせん
あまの
いんご

杜士等躍り出忽ち先ども
うつてをりし勢ひのさあつら破竹の
如くあるゆぞ徒士鎗持るる恐怖し
合羽の笠よ柄袋うひ遣まると狼
狽まる内み疵を負者うま
まをまて駕籠とたの衛士
等ハ先を防がん心せよと
皆その方へ立向ふ遠の時よ
いつう自然駕籠空虚ふ
ある時は彼の訴訟人のどた二人
始り十六七名抜つて群うかると
あつとをまひ切て什せ彦根の衛士等



彼方より期し
事よ各鎖子の
よりのあり其さ
身がりの出立ある
よを這方ふ意を
打まて事よて
身拵らんとする
虚回めあり
敵と四方へ受
この事由へ
薄子深子の
負さるる防

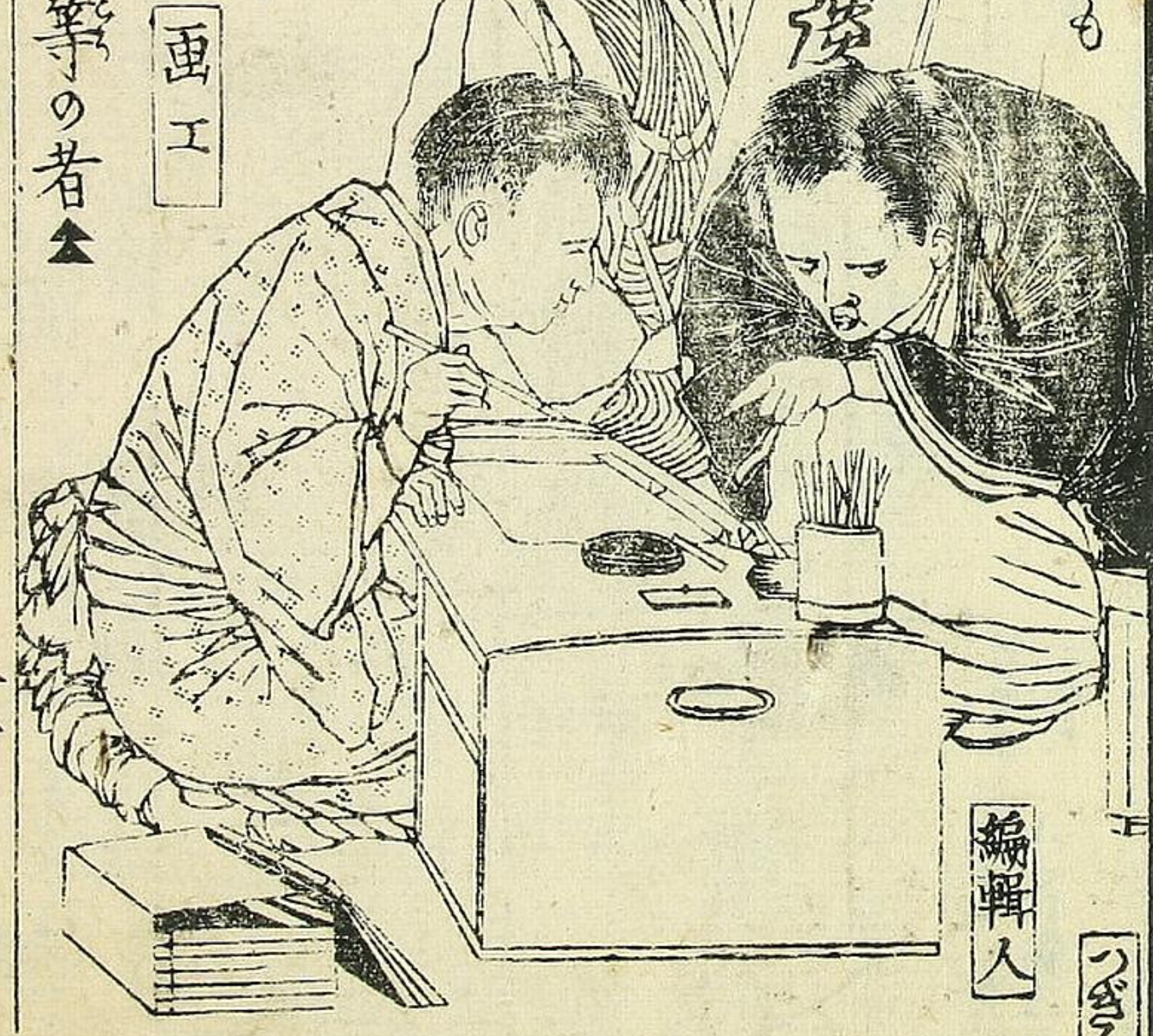
つら者あつて皆さうさうの討まされ
 まれたるを得らうと 榎工
 壮士等の駕の左右の
 立寄ると白刃をもちつて
 中將の棄物よ近つて
 櫓と突戸を蹴かちつて
 榎のじ 出版人
 會釈もあげの
 撃殺一凱
 歌をよめて首
 級を打とり早速
 岡千次郎常州水戸よ



彫工

及び
 有村
 治左門
 の其身も
 數ヶ所の

種々
 ちしうつらう残る者ども
 切ちし終るよ
 その切死はるもの
 有る中
 蓮田市五郎
 森五六郎
 大関 筆工
 和七郎金子孫次郎
 森山繁之助杉山
 弥一郎黒澤忠三郎筆の者々



編輯人

つぎ

010190508388

○ 義士銘々傳 <small>十八ヶ條</small>	一冊	○ 楠 公 <small>三代記</small>	十冊
○ 武 田 軍 記	一冊	○ 會 津 軍 記	二冊
○ 大日本東西軍記	二冊	○ 櫻 田 講 談	二冊
○ 諸國英雄軍記	二冊	○ 日吉九 <small>一代記</small>	二冊
○ 報國大和魂	四冊	○ 白石噺 <small>一代記</small>	一冊
○ 田宮坊太郎 <small>一代記</small>	一冊	○ 伊達大評定	三冊
○ 天 帥 軍 記	二冊	○ 平井權八 <small>一代記</small>	二冊
○ 豊臣太閤記	四冊	○ 改正 世界國盡し	一冊
○ 鹿兒島軍記	十冊	○ 教草七ッいろは	一冊
○ 大坂夏冬御陣	四冊	○ 延壽百人一首	一冊
○ 七體名頭字盡し	一冊	○ 大日本海陸里程全	一折
○ 明治太平記	廿四編出版 定價廿三錢	東京 日本橋通三丁目十三番地 丸屋 小林鐵次郎板	

東京繪入新聞社紙型版兼印刷

○ 櫻田講談下卷終

○ 重疵を肩ひぬまふ既に割腹ゆも及びぬ然まふと前小
記せし七名の浪士の今の心も安心しと関老股坂中務侯の郎
小至り此日の事件と自訴ある者も又細川家よのころも
ありけりも其年も暮まて文久と改元ありし辛酉の年七
月廿三日東都に於て刑せしむる其姓名。杉山弥一郎。佐野
作之助。稲田重藏。廣岡子之次郎。岡部三十郎。鯉淵要人
。山口辰之助。廣木松之助。林忠左衛門。関鑊之助。増子
清三郎。齋藤監物。右に記せし者ども
の死骸を本國よりつる親族等が公小
願ひ出さしその月の末つる水府小持へ
ともの祭事とゆふまじとを

明治五年四月二日柳屋
画二 山壽年信
編輯通三丁目四番地
出版人 小林鐵次郎

